

宗教の境界と身体実践

——マレーシアにおけるヨガの実践を事例として——

上智大学大学院 栗原美紀

1. 目的

本報告の目的は、マレーシアにおけるヨガの実践を事例として、宗教に関わる技法がその境界を越えて人々に受容されていく過程・様相について考察することである。現代社会では、伝統宗教の再興やスピリチュアリティ文化の普及など、公的領域・私的領域の双方において宗教やそれに類する実践の役割が拡大している。とりわけ近年では、医療や福祉の領域の中で宗教的な要素を取り入れようという動きが高まってきた。こうした現象については、特定の宗教的・文化的境界を越えた実践がどのように成り立っているのかを理解することが一つの課題となっている。

2. 方法

本研究では、マレーシアにおけるヨガの実践を事例とする。ヨガは今日、娯楽としてのエクササイズに留まらず、補完・代替医療という位置づけで、生物医学のみでの対処が困難な人々の受け皿としての役割を果たす。一方で、最近ではその起源がヒンドゥー教にあると判断されることで、他宗教徒から実践を拒否されることも増えている。そこで本研究においては、マレーシアのヨガ指導者に対する聞き取りとヨガクラスでの参与観察から、彼らがヨガの実践についてどのようにヒンドゥー教の文脈を乗り越えた理解をつくりあげているのかを考えたい。マレーシアを事例とするのは、主として二つの理由による。まずは、この国がヒンドゥー教徒・イスラーム教徒双方を含む多民族・多宗教社会であるためである。もう一つは、マレーシアでは過去に宗教的見解から国内のイスラーム教徒のヨガの実践が抑止されたことがあるためである。こうした理由から、ヨガが宗教を越えて実践される様子を把握しやすいと考えられる。調査は2017年から2019年にかけて、クアラルンプールとセランゴール州において断続的に行った。

3. 結果

指導者たちは、ヨガの実践について対外的な説明と対内的な説明を使い分けている。まず、彼らはヨガが実践者以外から特定の宗教的行為とみなされることに対して、直接的に抵抗するのではなく、むしろ衝突を回避していた。つまり対外的には、多義的なヨガの内容から一般的に理解されやすい科学性やエクササイズの側面を切り取ることで、他者への説明可能性を広げている。一方で、実践者に対しては論理的な説明よりも、指導者自身の体験談の共有や心身の動きのガイダンスなど、固定的な文脈を想起させない説明の方法をとっている。そうすることにより、実践者個人がそれぞれにもつ固有の背景からヨガを解釈することを可能にし、それが必ずしも一つの文化に帰属するものではないという理解の形成が促されている。

4. 結論

上述のような実践は、社会において宗教的要素の役割が拡大していく中で、それぞれが文化的独自性を維持しながら共存するのは異なる在り方である。むしろ、ヨガの指導者たちは状況に応じて輪郭を変えることで境界をぼかしている。ヨガが身体実践であることが、こうした手法をより顕在化させているといえよう。多宗教社会におけるヨガの実践を考察することは、多元化傾向にある社会の中で、人々が複数の思想と技法を組み合わせながら生きていく様相を理解することにつながっていく。

参考文献

Berger, Peter L., 1999, *The Desecularization of the World: Resurgent Religion and World Politics*, William B. Eerdmans.